

現世は今日もかなしや亡き母を偲びて心泣かんとするも（命 日）
曼珠沙華は毒なりと叱へどきかばこそつみとり居りし幼妹世になし
豫備少尉林是幹先生召集されこの峽の町きほひたちたり
みまかりし防人の母ならむ白木の箱抱き来る人老ひましておぬ
松虫の窓邊にきたりなきたつる夜はしみじみと思ふ事多し

拾ひ屑 一束

東

菑

庭隈の紅き山茶花咲き初めて寒き曇りを四十雀の來る
くぐもりの夕べさむしく山茶花にひつそりと來て鳴くみそさざい
山並みのはたては晴れてすむ空に八ヶ高嶺の雪ぞ光れる（下部街道）
ひとひとり通らぬれば椋の樹に雀はさわぐうるさきまでに
ひそまりてものの音たへし夜の湖にうつる三日月光鋭く
夜の湖は遙く寂けし吾が佇てる汀を洗ふ波もあらなくに
朝霧の林をとほし窓に入る陽すぢはずでに秋づきにけり
冬の陽のとどかずなりて庭隈の山茶花のはなは散りしきてあり
深霜は日にけにきびし庭への南天の實は朱味そめたり
風のしづみし夕べ裏山に落葉をさむく踏む鳥のあり
ここに來て心ひろらなり富士川の蜚蜨として白き一すぢ
雪霧のふかくたちこめ見もわかぬ谿間にぞ來て鳴く鳥のあり
曾つて師が住まひし釋迦堂今はなくて夕陽に淡く咲く胡蝶花の花
胡蝶花の花むらがり咲ける崖なだり夕日あかるくしばしを照らす

つたらうと今になつて悔悟の涙がさんぜんとして枕をぬらすのであつた。

死に行く我が子の枕下で父母はゞ茫然自失してつくねんと坐つたまゝ、手を合せて上人の御經の聲を聞いて居た。恐らくこれが此の世の最後の別れであらうと父母の顔を見上げた時あれ程肥つて居た父が今は六十の坂を越えて瘠せ哀へ、見るも哀れなおいばれ爺になり果てて居る母は雪より白い白髪頭。噫、此の老ぼれた父と母を残して死んで行つたなら、後に残つて父と母が何を便りに暮すだらう。

「噫阿父さん、お母さん。悪うございました。今日迄親不孝の数々。二十三の春。今こゝで私が死ぬといふ事を知つて居たなら、あなたに親不孝するのではなかつたのに、それは皆私に信仰心がなかつたからです。何卒お許し下さい。もう私はこの世へ旅立たなければなりません。死んだら一度御釋迦様の御膝下へ行つて、立派な御弟子となり今度この世に生れて來る時には必ず真心こめて親孝行を

夕陽あかあかと落葉松林に照れる時ながくは鳴かぬ春蟬のこゑ
 小夜更けを地震に目ざめてふとも聴くむさびの聲は谿を越えつる
 海ゆ昇る陽の明るさよ昨夜ひと夜雷は鳴りしが梅雨あくらし
 十四五の少女の唇に紅そめて暗きに恥じり客にも言ふ（巷）
 これがめらは生活の爲に媚賣りて己れ醜く馴れゆくらしも
 磯砂を踏めばにじみ來水音のすがすがしもよ朝日を浴びにつつ

叙景雜原不退

やはらかにたそがれそめし山並のみ雪の映へは愛しかりけり
 なよなよとうすくれのないの花ゆらぐ合歡の梢に夕あかりして
 あかねさす深草百合の山かげにひかげこもりてひぐらしのなく
 窓下のにびひろごりしかんぼちやのかたちとゝのひしもの七八つも見ゆ
 夕ざれば生き咲きそふ白粉の花の紅ひ美しみ見つ
 種熟れしこれが大き向日葵に轟たのしげに來鳴きつればむ
 雲ひくゝ霧の如にながれゆく山がひの街のあかつきよろしも
 きり小雨降りふかみつつまのかぎりおぼろけぶりて木立見へずも
 さらさらと又さらさらと群れて舞ふ落葉かなしも秋の風吹く
 ゆかしくもこれが賤家の軒にして菊咲きさけり大きな花して

御廟所

とほつ世に大きひじりの住みませしみあとおろがむ胸はせまりつ

致します。その時こそこの御經に書いてある様に一切の欲惡煩惱を捨て去つて佛の使となり命を捨て、衆生濟度に盡しませう。馬鹿たつた故に犯した此の世の罪を何率許して下さい。」と私は心の底から後悔するのであつた。

思へば昭和三年の春四月已來跣足詣りの願を起してから丁度滿三年目、今日こそ大願成就の日である。母の子に對する心、それを思ふと胸がはりさけるやうだつた。「さうだ此の年老いた父母の爲に斷じて死んではならぬ。それに今日は四月八日だ。」私は腹の底から湧き起る不思議な大勇猛心をむら／＼と感じた。病何者ぞ！私は床を蹴つて起きた。恐らくその時であつたらう。永年私を苦しめた病魔が朝霧の如く消失せたのは。

一切の魔を破して天晴地明、見る森羅万象盡く如來の慈光に浴して和氣溢れ、世は皆希望に燃えて居る。かくて後、病も癒えて私は父母の許しを得て髪を剃り佛弟子となり、今は身延の聖地にあつてありし日の先哲の死身弘法の尊き御生涯